

模擬ケース会議における学習過程の検討

—多職種連携教育 (IPE) の教材開発—

○荊木まき子 (兵庫教育大学連合大学院)

森田英嗣 (大阪教育大学)

問題と目的

現在学校ではスクールカウンセラー (以下 SC) やスクールソーシャルワーカー (以下 SSW) 等様々な児童・生徒支援に関わる専門職が導入され、学校内での多職種協働の構築が急務と考えられる。それに伴う協働可能な人材育成として、養成段階での多職種連携教育がある。多職種連携教育は、教育分野での先行研究は殆ど見られないが、医療分野では取り入れられつつある (吉村, 2012)。

本研究では、教員集団・SC・SSWによる模擬ケース会議の教材 (荊木・森田・鈴木, 印刷中) を開発し, ①模擬ケース会議の学習過程, ②学生の専門性理解, ③学生のケース会議理解について検討した。

方 法

対象：小学校教員養成課程学生10名

養護教諭養成課程学生13名

時期：2015年1月計3回

実施講義：教職関連科目での全15回の内、最後3回を協働単元とした。前段階でケース会議やSC・SSWは、小学校教員養成課程では触れず、養護教諭養成課程ではSCを校内支援者とのみ紹介した。

実施方法：A) 1回目は、情報カード実習 (柳原, 1976) により、中学2年女子のリストカット事例による模擬ケース会議を行った。5人班を作り、中学校の養護教諭, 担任, 校長, SC, SSWに役割を振った。養護教諭養成課程で、人数調整に2班, 養護教諭と管理職を兼務した。B) ケース会議の説明を記した指示書, 各役割に対し6枚の情報カード, 各自の専門性を書いた役割カードを渡し, 口頭のやり取りを指示した。C) まとめた情報をカンファレンスシート (大阪府教育委員会, 2006) に記入し, 支援計画を立てた。D) 2・3回目は, 各班が「アセスメントの結果明らかになったこと」「確認すべきこと」「長期的な支援計画」「短期的な支援計画」「課題にあった役割分担」を発表した。E) 各班にICレコーダーを学生了承の上配置し, B)・C) の課題検討の過程を録音した。

分析方法：a) 音声データを文字起こしし, 意味の塊毎に切片化, 通し番号を振った。b) KJ法により, 切片毎にラベルを名付けた。c) 類似したラベル同士をグループ化, 小・中・大カテゴリを形成, 個々の関係性を図式化した。d) 学生の専門性理解, ケース会議理解に関わるカテゴリを抜きだし, そこでの学習過程を④学生の専門性理解, ③学生のケース会議理解, ②その他の項目毎に関連カテゴリを分けて検討した。以下大カテゴリを【】, 中カテゴリを「」小カテゴリを()で括って示す。

結果と考察

①模擬ケース会議の学習過程：全体に【模擬ケース会議進行での協議行動】が見られた。最初に【情報カードの情報による指示と示唆】を行い, 【情報の集約による状況把握】により, 【明らかになったこと】【確認すべきこと】を決定した。その後【支援計画の検討】【支援方法の検討】より, 【支援計画決定】を行った。最後に支援の【役割分担】を行った。検討過程は, 【学生の素朴概念】が顕在化し, 【ケース会議への言及】も見られた。カンファレンスシートに沿って支援計画が検討されていたと言える。

②学生の専門性理解：【学生の素朴概念】は, カウンセリングを受けることへの否定的見方やSCに面接抵抗の解消や事情聴取, 説得等を期待する等, (カウンセリングへの過剰な期待と思ひこみ) がみられた。これらの考えは, 会議終了時まで修正されなかった。一方【ケース会議への言及】として, 情報・役割カードによるSSW理解と, 情報・役割カード情報と学生の既存知識からの推測・提案による理解がみられた。SCの専門性についても疑問が示された。即ち学生はSC専門性を, 既生素朴概念と統合しながら理解していったようである。

③学生のケース会議理解：【ケース会議への言及】では, 個々の情報のつながりや役割分担の意義, 目的を理解する「ケース会議の方法・意義・課題の理解」がみられた。一方, (現場での適用を懸念) する言動が見られた。

従って, 学生はケース会議の方法や意義, 現場での適用を検討し, 理解していると考えられた。

④その他：学生の素朴概念として, 事例検討から (いじめのクラス内黙秘と直接・間接的担任対応への不信感) 等が顕在化していた。【ケース会議への言及】では, (問題行動と課題の関連性) や中学生の面接の難しさに言及した (支援対象者理解), 校内の疎通性や教員の心理的支援に言及する (校内支援体制の必要性を理解) する言及がみられた。

事例に関する学生の経験により, 素朴概念が顕在化し, ケース会議周辺の言及が出現した。

以上より, 本教材の学生のケース会議理解は, 手法やその意義・現場での適用, 対象理解について考える機会となる半面, 学生の素朴概念払拭には至らなかった。これらの素朴概念は, 多職種協働の阻害要因となる可能性があるだろう。今後の課題として, 素朴概念の改善に, 他職種の実際の動きを記した事例学習等の併用が示唆された。